

この冬一番の寒波が襲い、寒風に粉雪舞う、
とある田舎町のコンビニに、年式も落ちたせ
いか、見栄えもパツとしない、白い軽自動車
が滑り込んだ。
車の中から出て来たのは、年老いた夫婦連
れ。開けたドアが激しい突風に揺さぶられる
と、運転席から降りた男も体ごと揺さぶられ
て、よろけそうになり、慌ててドアにしがみ
付いていた。
老夫婦は、互いに手を取り合い、ゆっくり
と足元を確かめるように歩を進め、コンビニ
の中に入つて行つた。
男は中をしげしげと見渡して何かを探すふ
くの一点で止まつた。
それは、肉まんの入つたホットケースだつ
た。

「大きいのと小さいの、どっちにする？」と

男が妻に訊いた。

「小さいのでいいよ」妻が即座に返した。

「そうだな」そう言うと男は、ポケットの小銭入れから、二個分の合計金額二百四十数円を拾い集め、店員に差し出した。男の後ろにはすでにレジ待ちの行列ができており、悠長な男の仕草に苛立ちを隠せない様子が顔立ちから明らかに見て取れた。
それに気づいた男は、さも申し訳なさそうに列に頭を下げてその場を去つた。
肉まん二個の入ったほかほかの紙袋をさも大事そうに手に抱えた男は、妻とともにゆつくりと車に戻り、エンジンをかけると、帰路には向かわず、広い駐車場の誰もいない片隅に車を移動させた。
「久しぶりだな、何年ぶりかなあ、肉まん食べるの？」男が言った。
「うん、そうだね」妻が返した。

実は、この二人のこうしたいきさつには伏

線
が
あ
つ
た
。

この夫婦は貧しく、明日の飯にも事欠くほ
どの日々を送っていた。男はある事件を契機
に借金生活に追われ、僅かばかりある年金の
大半もその返済に充てなければならなかつた
この日は、男の誕生日だつたのだが、財布
の中には、もはや五百円足らずしか残つてい

その数日前のことだった。暖房にも事欠く薄暗い部屋の中で妻がぽつりと言った。「こんな寒い日はあつたかい肉まんが食べたいわね」

「肉まんのぬくもりか、さぞや心も温まるだろうなあ：」ひとり男はそう呟いた。
そして、誕生日を迎えたその日のこと。甲は小銭入れから硬貨を机の上に広げると、その数を正確に数えてみた。合計五百十二円五

肉 まん 二 個 何 と か 買 え る で は な い か 。 男 は
小 躍 り し た 。 す ぐ に 妻 に 言 つ た 。
「 誕 生 祝 い だ 。 コ ン ビ ニ に 行 こ う 。 肉 まん 肉
ま ん だ : 。 今 か ら 買 い に 行 こ う 「
妻 は さ も い ぶ か し げ に 夫 に 訊 き 返 す 。
「 も も 、 お 金 は あ る の ? 」
「 肉 ま ん 二 個 だ け な ら 何 と か な り そ う だ 」
男 は 嬉 し そ う に 返 し た 。 久 し ぶ り に 妻 の 喜 ぶ
顔 が 見 れ そ う だ 。
そ こ で 、 話 は 先 ほ ど の 車 の 中 に 戻 る 。
車 の エ ン ジ ン は 、 か け た ま ま だ 。 フ ロ ン ト
ガ ラ ス の 向 こ う に は 遠 く 山 並 み が 見 え る 。 空
は 相 变 わ ら ず 灰 色 に 曇 つ た ま ま だ 。
粉 雪 が 寒 風 に 舞 い 、 フ ロ ン ト ガ ラ ス に 吹 き
つ け る 。 手 の 中 に く る ん で ほ お ば る 肉 ま ん の
な ん と お い し い こ と 。 そ れ を 助 長 す る の は 、
手 か ら 伝 わ る そ の ぬ ク も り 、 そ し て 、 心 に 染
み 入 る そ の 匂 い だ つ た 。
な ゼ か 、 男 の 目 か ら 涙 ら し き も の が 溢 れ 出

た。見ると妻もまた前方の遠い景色を見るで

もなく見つめながら目に涙を浮かべている。
「おいしいね」とひと言妻が言った。

「うん、おいしい。こんなおいしい肉まんの味、一生忘れないだろうなあ」

男はしみじみと妻に返した。それは、まるで自分に語りかけているようでもあつた。
そんな会話を交わしたのち、二人を乗せた軽自動車は、何事もなかつたかのようにコンビニの駐車場から出て、もと来た方へと引き返して行つた。

幸せい源泉は、どこにあるのか、なかなかわからぬいものである。

(了)